

宮島 達夫・鈴木 泰・石井 久雄・安部 清哉

(2014) 日本古典対照分類語彙表。笠間書院。

立命館大学アートルサーチセンター 書籍閲覧システム

<http://www.dh-jac.net/dbl/books/search.php>

題の語句を歌に詠み込むことは、表現の幅を少なくとも外見上は狭めることになる。七体七百首では、題の語句をそのまま七首に詠み込んだという題が、5に記したように44ある。その一覧では、関係する用語を考慮しなかったが、共起したり呼応したりする表現もある。また、数首で用語を置き換えたり、題の語句に即するのが5～6首にとどまったり、したとして5・6に記したものが、そこで算出はしなかったが31前後ある。一首当たりで自由になる分量は3句分程度に過ぎない、という感覚である。

七体七百首は、そのような窮屈な世界で、六運に沿って歌を詠んだというのである。そのつもりで注解の事に当たらなければならないことになる。題の語句からは比較的自由であるように思える、漢語の題の歌、あるいは恋の題の歌から、考え始めるのがよいということであるかもしれない。

ここでは全体がただの表作りで、結果も面白くはなかった。しかし、春の国文学会で富士谷成章・七体七百首の話をしたときから、——始めないことにはどこにも進めない、ともかく着手せよと、幾たびか背を押してくれたひとがいた。富士谷成章宅址の脇で育ったという城阪早紀さんに、感謝します。

参考文献

- 石井 久雄 (1992) 昔はどう言ったかと、知りたいとき。
 国立国語研究所報告 104 研究報告集 13 pp.31-76。
 —— (2012) 当代語から古典語を引き当てる辞典の出現と展開。
 古橋・鈴木・石井 (2012) pp.335-348。
- 佐田 智明 (1990) 富士谷成章の換玉帖について。
 熊本大学, 国語国文研究と教育 24 pp.1-10。
- 竹岡 正夫 (1961) 富士谷成章全集 上巻 語学編 歌学編 論注。風間書房。
 —— (1962) 富士谷成章全集 下巻 歌文漢詩雑編 研究篇。風間書房。
 —— (1971) 富士谷成章の学説についての研究。風間書房。
- 田中 敏生 (1998) 精神作用と事態関係
 ——成章『換玉帖』における〈旨・趣〉分析の諸類型。
 四国大学紀要 A人文・社会科学編 10 pp.153-173。
- 古橋 信孝・鈴木 泰・石井 久雄
 (2012) 現代語から古語を引く 現古辞典。河出書房新社。
- 三宅 清 (1981) 新編 富士谷御杖全集 第五巻。思文閣出版。

620 祝 は、用語「君」が6首に見られ、「千代」などが添う。異なる1首は次である。

vii自創 わが国は みもすそ川の 末なれば よろづよやすく 民もすむらし

当然のことながら、題の語句が見えなくとも、題意は表現されている。四季の歌について、題意の表現の核であろうところに、下線を施してみた。題の語句の類義語と扱ってもよかったようなものである。

なお、ここに挙げた題について、題の語句を見せているものを、念のために並べる。ただし、各題一首、いずれも中昔により、206 早苗 のみは中頃による。

- 115 苗代 いつのまに くれぬる春ぞ 小山田の なはしろ水に たねおろすまで
 206 早苗 いかにして 門田のさなへ とりはてむ けふさみだれは ふりはじむめり
 207 照射 さつき山 ともすほくしの かげみてぞ しかまつ人は ありとしらるゝ
 208 五月雨 さみだれに みだれてものを おもふよは 秋のながさに おとらざりけり
 214 泉 そでにいかで つゝみもたらん 日ぐらしに むすぶいづみの そこにわく玉
 411 神楽 あそびする 雲井の庭の 榊葉に おくしも白し ふけぬこの夜は
 412 鷹狩 はるかなる 野べにはやども なげなるを ふりはへ人の かりにきつらん
 602 松 おほはらや をしほの小松 二葉より 千とせのかげの しるくも有哉
 612 旅 ふるさとへ かへるたびぢと おもひせば 草のまくらも 露けからじを
 617 夢 物おもへば よるとてやすき いもねぬを いかなるひまに 夢のみゆらん
 620 祝 よの人の はるかに思ふ 八千とせを 君はやすくぞ おくるべらなる

7 恋の題の語句

恋の題の語句は、歌に詠み込むことがほとんどできない。恋の題は次のようである。

501 初恋 503 不逢恋 505 後朝恋 507 旅恋 509 片思

502 人不知恋 504 初逢恋 506 逢不遇恋 508 思 510 恨

とりあえず、508 思、509 片思、510 恨 の用語を挙げる。

	508 思		509 片思	510 恨
i 上世	4 思ひ	2 恋	3 片恋	
ii 中昔	5 思ひ入る		3 君	4 恨む
iii 中頃		4 恋	4 片思ひ	4 恨めし
iv 近昔	4 思ひ		4 人	2 恨み果つ
v 昨世	3 思ひ		2 人	4 人は思はず 5 我は忘れず
vi 今世	4 思ひ		3 人	1 思ふをも 2 思はぬ中
vii 自創	5 思ひ乱る	1 恋し	4 君	3 片思ひ
				5 恨み

題の語句が七体の用語として簡明に現れているものは、以上である。現れる句順を記したが、それから見えてくるものが何であるかは、まだ見当が付かない。

6 題の語句を詠み込まないこと

四季および雑で、題の語句が和語であるばあい、それを詠み込まないものが一首でもあるならば、その題はまだ取り上げていない。それについてメモを残す。

115 苗代 は、用語「なはしろ(水)」が6首に見られる。異なる1首は次である。

i 上世 あし引の 山ざくらさく 尾上田に ゆだねまくべき 時にはなりぬ

206 早苗 は、用語「(さ)なへ」が6首に見られる。異なる1首は次である。

ii 中昔 さみだれも いまだふらねば きのくにの むろのはやわせ いそぎとるらし

207 照射 は、用語「ともし」または「灯す」が6首に見られる。異なる1首は次である。

vi 今世 めをあはす しかもやあると さつをらが まつにおもひを かくるよなゝゝ

208 五月雨 は、用語「さみだれ」が6首に見られる。異なる1首は次である。

i 上世 日ならべて 雨ふるみれば ほとゝぎす きなくさ月と しるくありけり

214 泉 は、用語「いづみ」または「しみづ」が5首に見られる。異なる2首は次である。

i 上世 君が家の 鳥のめぐりゆ たぎちゆく みづのときけば すゝしくも有か

iii 中頃 山川の いはきりとほす 白浪は 秋にもこえて 涼しかりけり

411 神楽 は、用語「あそび」または「ことふえ」が6首に見られる。異なる1首は次である。

iv 近昔 有明の 月も庭火に てりそひて さやかにきこゆ 朝くらのこゑ

412 鷹狩 は、用語「かり」または「たか」が6首に見られる。異なる1首は次である。

iv 近昔 ふる雪に はなの衣の かへるさも 忘れて猶や とだちもとめむ

602 松 は、用語「まつ」が6首に見られる。異なる1首は次である。

vii 自創 ちはやぶる 神にあらずは いかにして 一よにちよの たねをまかまし

612 旅 は、用語「たび」が5首に見られる。異なる2首は次である。

iii 中頃 あら野らに このはかりしき さぬるよの 衣手さむく あられふるなり

iv 近昔 み山べや たのむ夢ぢも あらし吹 松がねまくら 袖さむくして

617 夢 は、用語「ゆめ、いめ」が6首に見られる。異なる1首は次である。

v 昨世 ぬるがうちにみるもかはらぬよのなかを うつゝと思ふぞ うつゝともなき

	605 駒迎			614 山家		615 田家
	駒 引く	月	逢坂	山 里 家		小山田 かりほ
i 上世	4		1	2 3		5 小田 2
ii 中昔	5 4	2	1	2 2		1 2
iii 中頃	3 3	4	5	2 山里 3 柴の戸		4 田ぶせ
iv 近昔	2 1 引き分く			5 岑 1 庵		2 山田 4 いほ
v 昨世	5	5 月影	3	3 山里		3 1
vi 今世	5 4 引き絶ゆ	5 望月		3 山里		2 小田 2 いほ
vii 自創	3 3	1 望月	5	3 山里		5

題の語句でなく、同義ないし類義の用語で置き換えるものがある。次の一覧では、関連する用語については記さない。また、最後の 605 鶴 では、漢字の訓、つまり用語が確定できず、原文の漢字・仮名のとおりに挙げる。

	105 若菜	108 柳	110 桜	211 蚊遣火	213 氷室
	わかな	やなぎ	さくら	かやりび	ひむろ
i 上世	4	2	4	2 かひや	3 氷
ii 中昔	5	3 青柳	3 桜花	2	1 氷室山
iii 中頃	2 朝菜	3	4 花	3	1 氷室山
iv 近昔	1	5 青柳	4	5	3
v 昨世	5	5 青柳	4 花	3	3 氷室山
vi 今世	1	5 青柳	4 花	5	4 氷
vii 自創	2	2	3 山桜	3	4

	302 七夕	305 薄	317 虫	319 紅葉	409 水鳥
	たなばた	すすき	むし	もみち しぐる	みづとり
i 上世	1 天の川	4 尾花	3 きりぎりす	5 もみちふ	1 3
ii 中昔	1 天の川	4 尾花	3	4	2 しぐる 5 をし
iii 中頃	1	5 むら薄	4	4	2 しぐる 2 をし
iv 近昔	3 天の川	4 尾花	1 きりぎりす		2 しぐる 5 をし
v 昨世	2 天の川	3 花薄	5 松虫	4 もみち葉	1 露時雨 5 をし鳥
vi 今世	1	2 尾花	5	3 もみち葉	5 をし鳥
vii 自創	1 天の川	4	1 松虫		1 うちしぐる 1

	601 暁		605 鶴	
	暁 鳥		鶴	たづ つる
i 上世	1			4 たづがね
ii 中昔		5		3 あしたづ
iii 中頃		2	2 鶴群	
iv 近昔		4 ゆふつけ鳥		4 たづがね
v 昨世	5 有明	1 庭つ鳥		3
vi 今世		2		3 つるむら
vii 自創	3		3 しら鶴	

それをどのような用語としているかを、仮名で併せて記す。複合の用語が優勢であればあいには、組み合わせられた用語を（ ）内に記す。また、その語句が出現した句順を、七体の順序で示す。318 菊 は題の語句が漢語であるが、この類である。

題	用語	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	題	用語	i	ii	iii	iv	v	vi	vii
103 霞	かすみ	3	2	4	2	4	2	4	311 露	つゆ	5	3	4	2	5	5	3
104 鶯	うぐひす	1	3	3	5	5	1	5	312 霧	きり	2	2	2	3	4	5	3
107 梅	うめ	4	3	3	4	5	4	3	313 槿	あさがほ	1	3	5	1	4	5	1
114 喚子鳥	よぶこどり	1	4	3	3	1	1	4	315 月	つき	1	2	3	5	4	5	3
116 菫菜	すみれ	4	4	4	1	3	3	4	318 菊	きく	3	3	3	3	3	2	5
117 杜若	かきつばた	3	3	3	3	5	3	3	402 時雨	しぐれ	2	2	5	4	5	5	5
118 藤	ふぢ(波)	1	3	5	5	1	5	5	403 霧	しも	5	3	2	5	4	5	2
119 款冬	やまぶき	3	1	1	1	3	3	1	404 霰	あられ	1	4	4	5	3	2	2
202 卯花	うのはな	2	5	1	1	1	3	4	405 雪	ゆき	5	1	5	5	5	4	4
203 葵	あふひ	4	2	2	2	4	4	3	407 千鳥	ちどり	4	2	1	4	4	5	5
204 郭公	ほととぎす	1	1	3	4	4	3	5	408 氷	こほり	5	2	2	4	3	4	4
205 菖蒲	あやめ	1	2	4	4	5	2	2	410 網代	あじろ(木)	5	1	4	5	3	2	1
209 盧橘	たちばな	2	4	1	2	1	5	5	413 炭竈	すみがま	4	4	1	1	5	5	5
210 螢	ほたる	4	2	3	1	4	3	1	414 炬火	うづみび	3	4	4	5	5	5	5
212 蓮	はちす(葉)	3	2	1	2	5	1	2	603 竹	たけ	2	3	2	4	1	5	5
303 萩	(秋)はぎ	2	5	1	2	4	5	5	604 莓	こけ	2	3	4	3	3	3	1
304 女郎花	をみなへし	1	3	3	1	1	1	1	606 山	やま	5	2	4	5	4	2	2
306 刈萱	かるかや	3	3	4	3	3	5	5	607 川	かは	4	1	3	3	5	5	4
307 蘭	ふぢばかま	3	1	3	5	3	1	3	608 野	の	4	3	4	5	4	4	2
308 萩	をぎ(の葉)	2	4	2	4	4	1	2	609 関	せき	2	4	5	2	4	4	5
309 雁	かり(がね)	2	4	4	5	5	4	5	610 橋	はし	4	2	2	5	5	2	3
310 鹿	しか	4	2	3	4	4	4	4	613 別	わかれ	2	4	1	5	5	4	5

題の語句の一部が現れて七体すべてで題に関係する、というものがある。

	102 子日	109 早蕨	111 春雨	112 春駒						
	子日	初子	早蕨	蕨	春雨	春	雨	春駒	春	駒
i 上世		2	5		1				1	4
ii 中昔	1			2		2	3長雨		1	3
iii 中頃	3			5	1				1	4
iv 近昔	3		5 初蕨		4			5		
v 昨世		4	4 木の下蕨		3					5
vi 今世		2	5			5	4		1	2
vii 自創		2	5		5				3	2

これらでは題の語句そのものも見えるが、次では見えない。

- 616 懐旧 で「昔」(ii 4, vi 4, vii 5), 「いにしへ」(i 3), 「こしかた」(v 1) であり,
- 619 述懐 で「身」(iv 5, v 1, vi 2, vii 3) および「言の葉」(iv 1, vii 1), 「思ひ」(v 2, vii 3) である。
- 618 無常 では、「世」をよく見せるほかに、次のような状態を呈する。歌の全部を引用し、題の語句でありうるものについて、直前に記号を書き入れるとともに、右にまとめる。「a 世」を取り巻く語句が、一方、i・iv・vi・vii で「b 常, c 春, d 花, e 散る, f 秋, g 月」であり、他方、ii・iii・v で「w 雲, x はかなし, y 身, z 経」であったり、二分されている。なお、動詞「あり」などは取り上げない。

- i うつせみしbつねにあらめやc春d花のにこえさかりてeちらくおもへば bcde
- ii 露のy身をやどしぞかぬるa世中や草葉よりけにxはかなかるらん a xy
- iii gはかなくてaよにもzふるかなw雲にとふくすりはむべき此y身ならねば aw yz
- iv dはなのc春もみちのf秋の色々はaよのbつねなさをみするなりけり abcd f
- v しかりとてw雲にものらぬaよにしあれば猶xはかなしといひつゝぞzふる awx z
- vi さけばeちりみつればかくるc春f秋のdはなとg月とぞひとのaよの中 a cdefg
- vii aよのなかは水にやどれるg月かげのあるをありともたのむべきかは a g

題の語句というのは、題が漢語であってその訓が広く知られているのでないばあい、以上のような姿を見せる。音が一般的である「菊」については、後で触れる。

5 題の和語の詠み込み

題の語句が和語であるならば、そのまま歌に詠み込むことができる。例えば 103 霞では次のようである。

- i 上世 春山の この葉しのぎて たつ霞 いたくなたちそ 妹があたりみむ
- ii 中昔 たちわたる 空のかすみや あし曳の 山にも春の 色をそむらむ
- iii 中頃 あかしがた せとの汐かぜ ぬるからじ かすみぞわたる 淡路しま山
- iv 近昔 まつ人も こず糸の霞 へだてつゝ みやこにとほき 春の山ざと
- v 昨世 浅みどり うみ山かけて 立こむる 霞やはるの 色とみゆらむ
- vi 今世 立わたる かすみのをちに へだてゝぞ 野山も春の いろはみえける
- vii 自創 山姫の たつとはすれど かさならぬ 霞のころも 春さむげなる

iii 中頃では複合動詞「霞み渡る」の前半であるが、複合や転成の用語で詠み込んだものも取り上げることとする。七体のいずれにも題の語句を詠み込んだというのが、百題のうちでは44件にのぼり、詠み込みのしかたとして最も多い。

七体すべてに題の語句を用いているというものを、一覧する。題は漢字表記であり、

の〔 〕は省く。() を添えたものは、一日が終わる意味であり、季節・年の終わりを直接に言うのでない。夏の尽日の 215 荒和祓 は題が和語であるが、併せて掲げる。

	120 三月尽	320 九月尽	415 歳暮	215 荒和祓
	春 暮る	秋 暮る	年 暮る	みそぎ 川
i 上世	2 2 暮れ果つ	5 (3)	4 4 果つ	5 夏祓へ 1 吉野川
ii 中昔	4 4 暮れ行く	3	4 4 行く	1 なごし 4 瀬
iii 中頃	5 5	1 2	4 4 積もる	3 4 川辺
iv 近昔	4 (2)	1 (4)	5 5	4 1 みそぎ川
v 昨世	1	4	2 2 暮れ行く	2 2 浜辺
vi 今世	4	5 5	2 3	2 1 ゆふは河
vii 自創	5	5 5 去ぬ	5 5 暮れ	1 3 早瀬河

尽日の題は、時節の用語を必ず織り込む。関連用語では動詞「暮る」が目立ち、名詞「暮れ」もあって 415vii5「年の暮かな」である。和語による 215 荒和祓でも、題の語句は現れず、用語「禊」などで置き換わり、「川」がよく関係する。

さらに四季のうちから、他のものである。

	106 残雪	201 更衣
	雪 残る	衣 脱ぎ更ふ
i 上世	4 雪げ 4	1 夏衣 2 更へ着る
ii 中昔	3 5 消え残る	1 夏衣
iii 中頃	5 はだれ 5	3 唐衣 2
iv 近昔	3	5 衣手 1
v 昨世	5 白雪 4 斑消え残る	2 3
vi 今世	4 2 斑消え残る	5 1
vii 自創	4	2 羽衣

	401 初冬	406 寒蘆
	冬 来 風 寒し	蘆 葉 枯る 風 吹く
i 上世	4 嵐 4 4 4	4 1 2
ii 中昔	1 4	2 蘆辺 1 枯れ残る 4 浦風 5
iii 中頃	3 冬枯れ 3 3 2 2 しほれ葉	3 3
iv 近昔	1 1 5 5 むら蘆	5
v 昨世	5 5	4 5 葉隠れ 4 枯れ行く
vi 今世	5 5	3 蘆ま 1 葉隠れ 5 冬枯れ
vii 自創	5 5	2 3 しほれ葉 1 霜枯れ 5 浦風 5

漢語の題として、また雑に 611 海路・616 懐旧・618 無常・619 述懐 がある。題に
関係する用語は、

- 611 海路 で「舟路」(v4), 「舟」(i2, ii3, iii3, vi3), 「わたつみ」(i3), 「わたの原」(iv1), 「大海の原」(ii2), 「沖」(v2, vii2) であり、

る。句切れについても、和歌史としての位置づけができないので、立ち入らない。

なお、堀河院百首は、どの歌も、確実にある時代のある時に詠まれている。勅撰和歌集では、前代に詠まれた歌も混在し、それに対して時間上で言えば純粹である。このような定数歌や歌合が和歌史に基盤を与えるということは認識しつつ、以下では、他を見ずに七体七百首を注視する。ただ、僅かに、堀河院百首は時に触れることがある。その本文は、題「述懐」に見える仲実の旋頭歌（国歌大観番号1575）および俊頼の長歌（1576）を除き、反歌（1577）は検討の対象として、都合1,599首である。すぐ上でも、この数値を使用した。

4 題の語句

題の語句とここに言うものは、上に引いた立春では「立春」である。この漢語は歌には和語に換えて詠み込むことになり、その和語がすなわち下線部である。整理をすると、次のようになり、現れた用語に句順を記す。語順までは見ない。同様に語句が漢語である題のうちから三つを並べ、用語が複合であるときには〔 〕を添える。

	101 立春	113 帰雁	301 立秋	316 擣衣
	春 来 立つ	雁 雁がね 帰る	秋 来 立つ	衣 うつ
i 上世		2	4 [5]	[2][4]
ii 中昔	1 1	4	4 4	[3] 4
iii 中頃	5 5	2 2	2 2	1 1
iv 近昔	5 5	5 5	5	5 5
v 昨世	2 2	5 5	5 [5]	5 5
vi 今世	1 1	5 [3]	1 1	5 5
vii 自創	2 1	4 5	5 5	2 1

複合の用語は、「立かへる」(113vi3)、「たちしくらしも」(301 i 5)、「きならし衣…うちもやまねば」(316 i 2・4)、「から衣」(316 ii 3)である。「なる」(301 v 5)を挙げたが、複合でなくて類似の用語である。これらの題では、言い換える和語が固定している。和語に言い換えることも、その和語が何であるかも、堀河院百首によく似る。

なお、用語「着慣らし衣」は、万葉集になど上世に見られず、日本国語大辞典第二版が後拾遺集を挙げるのによるならば、中頃以降のものであろうと思われる。用語の時代性を七体七百首は必ずしも顧みないようである。そもそのことを言うならば、立春以下の四季の移行の観念を確立したのが古今集であり、百題もその観念に随うから、組題を上世に持ち込むことが不条理であるのかもしれない。

漢語の題で和語一つに置き換えられないものを、さらに掲げる。まず、四季から、季節の尽日のものである。複合の用語は、あるいは類似の用語も、表中に書き込み、句順

「あ」48句、「い」28句、……、六運で（表左列、下半分）上世29句、中昔23句、……、句順で（表上行、左から）初句29句、二句21句、……である。「あ」は（表左上部）初句12句、二句7句、……、（表右下部）上世17句、中昔9句、……である。

字余り	初句	二句	三句	四句	五句	あ	い	う	お	ゆ	
	121	29	21	36	13	22	48	28	20	23	2
あ	48	12	7	11	5	13					
い	28	7	8	12	1	0					
う	20	7	2	8	2	1					
お	23	3	4	3	5	8					
ゆ	2	0	0	2	0	0					
i 上世	29	7	8	3	5	6	17	8	3	1	0
ii 中昔	23	8	4	2	2	7	9	2	3	9	0
iii 中頃	10	1	2	4	0	3	3	1	2	4	0
iv 近昔	17	3	2	9	2	1	5	6	4	1	1
v 昨世	14	5	1	4	3	1	5	4	2	3	0
vi 今世	13	3	0	9	0	1	5	4	2	1	1
vii 自創	15	2	4	5	1	3	4	3	4	4	0

念のために見るならば、堀河院百首の字余りは次のようである。七体七百首の集計の左上部分に対応する。七体七百首での字余りの句数121は、全句数3,500の3.4%であるが、堀河院百首の字余りの句数195は、全句数7,995（＝5句×1,599首）に対して2.4%であり、七体七百首のほうが多い。堀河院百首は六運の中頃に位置し、七体七百首の中頃のみを取り出すと、中頃の字余りは六運中で最小2.0%（＝10句÷500句）であって、さすがに堀河院百首より小さい。字余りが多く現れる句順は、七体七百首で三句・五句であり、堀河院百首で五句・初句である、といった違いも見られる。

	初句	二句	三句	四句	五句	
	195	56	19	30	20	70
あ	75	13	8	10	6	38
い	29	17	3	4	5	0
う	15	9	0	6	0	0
お	70	15	5	10	8	32
や	1	0	1	0	0	0
を	2	1	0	0	1	0
他	3	1	2	0	0	0

字余りの句が二つあるという歌が、七体七百首で9首、堀河院百首で10首あるが、立ち入らない。字余りでありうる仮名が二つあるときに、例えば「いへにある妹が」（七体七百首205 i 4）では「あ」を字余りとしたなど、細かいことにも立ち入らない。字余りの様相が和歌史のうえで整理できず、細部を適切に評価することができないからであ

「境」をどのような型を通して、和歌という表現に凝縮するか、その感じ方、とらえ方、受け取り方、つまり認識のしかたという「型」にこそ時代的変遷が認められるのである。その「型」の最小の単位は単語であるが、中昔以後の和歌においては、この最小の型までは、そうひどく変遷していない。成章の術語でいえば、「表・裏」「内・外」「神・しるし」「咏・疑・願・詠・禁」などに分類されている各旨趣、つまり、とらえ方、感じ方が変遷しているのである。古今和歌集で貫之のいう「さま」が変遷しているのである。この『七体七百首』も正にそのような「旨趣」の変遷を具体的に示そうとしているところにまず目をつけるべきである。「心」「詞」「姿」などという伝統的な観点では、成章のこうした歌学は全く理解できないであろう。（『富士谷成章全集 下巻』 pp.913-914。下線は石井が施した。）

竹岡がここで参照している成章の術語・概念については、いま立ち入る余裕がない。

旨趣ないし換玉帖について、竹岡（1962 pp.1098-1185）（1971 pp.527-777）・佐田（1990）・田中（1998）の論考があることを承知しつつ、本稿では、いま引用した竹岡に反して、素朴に七体七百首の用語の外見を整理しておきたい。特に、題そのものの語句を歌でどのように用いるかということ、とりあえずは眺めることとする。旨趣なり変遷なりの結果の様に、その根源を見ずに、よく言って愚直、ありていに言えば愚劣に、向かうということである。七体七百首をいづれまともに取り上げることが期しつつ、いまはそこから始める。

3 全体的なことがら

七体七百首の全体的な傾向について、2点記す。成章は、和歌を有栖川宮職仁親王および名家広橋勝胤に学んで堂上派に連なり、七体七百首の全体の雰囲気も、自創体を含めて、正統を外れずに端正であると感じられる。記す2点はそこにかかわるであろう。

全体の傾向の一つは、歌に現れる語句の語種が専ら和語であることである。例外となる漢語は、1語、名詞「菊」であり、題「菊」（318）の全7首に、単純語で4首「菊の花」（i3）「けふのきく」（iv3）「菊なくば」（v3）「菊はなさけも」（vi2）、複合語「白菊」で3首「しら菊は」（ii3）「白菊の」（iii3）「しらぎくの花」（vi5）と見え、また題「九月尽」に「庭の菊」（320v1）と見える。

全体の傾向のいま一つは、字余りがア列・ヤ列の仮名「あいうおゆ」を含む句においてのみ現れることである。それ以上には、いま何も言いえないが、句順および六運を軸に置いて集計するならば、次のようである。上および左の斜体は合計である。700首3500句のうちで字余りがあるもの121句（表左上隅）、仮名で分けて（表左列、上から）

みにくれば」, 恋部第10題「恨」上古体4句「名をのり本ノマ、」の二つがある。春のほうは「花みにくれば」とする。恋のほうは、「本ノマ、」が小字右寄せであり、仮名3字分の欠損があるとせざるをえない。

以下, 引用するに当たって, 数字5個を連ねた番号vwxyzを歌・句に付する。

- v 堀河院御時百首和歌の部立て 1春 2夏 3秋 4冬 5恋 6雑
 wx 各部における順序 01から 春20 夏15 秋20 冬15 恋10 雑20まで
 y 六運について i 上世 ii 中昔 iii 中頃 iv 近昔 v 昨世 vi 今世 vii 自創
 以下, 六運の名は, 七体七百首によらずに, あゆひ抄による。
 z 句の順序 一首ごとに1~5

例えば, 上の立春で, 中古体の下線を施した句は101 ii 1である。

2 注釈・研究

七体七百首には, 著者にも校訂者にも, その門下にも後人にも, 注釈あるいは研究と
 言うべきものが見られない。例外と思われるものが, 上掲三宅書における解題, および
 竹岡書の研究篇である。

三宅の解題は, 筆写の原稿本があること, 板本はそれと10首余の異なりがあることな
 どを指摘し, 成章のこの著作を御杖全集に取り込んだ意図として, 次のように述べる。

成元校という署名は空文ではない筈である。成元は上古体と見える歌体の歌を中古
 体その他から削除し, 古語と近体と調和した自創体の完成に多少の修補を加える所
 があり, 自ら板下を清書してこれを彫刻せしめたのであろう。

成元が寛政中期に北辺歌学の標本の一つとして世に出した注意すべき文献の一つ
 としてあえて彼の全集の中に加えた次第である。 (p. 11, 解題は pp. 5-12)

竹岡の研究篇は, 六運をふまえながら七体七百首を説明して, 次のように言う。

ところで, 成章は, いかなる基準によって, このような和歌の時代的変遷を認め,
 時代を区分したかということについては, 成章自身の説明がないから確かなことは
 わからない。……。しかし『あゆひ抄』や『換玉帖』などの諸説, 『七体七百首』
 や「むきはのうた」の実際例から考えられるところでは, 成章が和歌を表現過程上
 より分析した「姿」や「境」あるいは「体」「上」の観点から区分しているように
 は見えない。上世体はさすがに特別の用語に特色を持たせているようであるが, 中
 昔以後の歌ではさような所には特徴がない。成章がこれらの時代的変遷観の基準と
 しているのは『換玉帖』で言う「旨趣」のところにあると考えられる。すなわち,
 たとえば「立春」といえば, その和歌での「境」は各時代とも変遷はない。その

7首というのは、和歌史の時代を六つと設定してその時代時代に見合った6首、およびそのいずれにも属さない1首である。六つの時代は、あゆひ抄で六運として記され、また六運略図并弁に示されたものであって、あゆひ抄には次のようにある。

六運 開闢より光仁天皇の御世までをおしなべて上つよといふ。其後より花山院御世まで二百五年を中むかしといふ。後白川院御世まで百七十二年を中ごろといふ。四条院御世まで八十四年を近むかしといふ。後花園院御世まで二百二十二年ををとつよといふ。其のちを今の世とす。 (1冊13葉裏面)

時代区分は、六運略図などでは勅撰集に基づいて説明され、いま勅撰集とともに並べるならば、次のようである。「をとつよ」の漢字「昨世」は私に宛てる。

かみつよ (上世)	781天応元年	光仁天皇退位	まで	1441年間以上
なかむかし(中昔)	905延喜5年	古今集	955天曆9年	後撰集
	986寛和2年	花山天皇退位	まで	205年間
なかごろ (中頃)	1005寛弘5年	拾遺集～	1151仁平元年	詞花集
	1158保元3年	後白河天皇退位	まで	172年間
ちかむかし(近昔)	1188文治4年	千載集～	1235文曆2年	新勅撰集
	1242仁治3年	四条天皇退位	まで	84年間
をとつよ (昨世)	1251建長3年	続後撰集～	1439永享11年	新続古今集
	1464寛正5年	後花園天皇退位	まで	222年間
いまのよ (今世)	以降			309年間以上

七体七百首の本文の冒頭を掲げる。内題・署名および題詠1題分である。時代の名が六運と異なり、またどの時代にも属さないものは「自創体」である。

七体七百首

富士谷成章 著
男 成元 校

立春

上古体 ものみなも あたたまりけり あたらしき 年のはじめに あひしあひてば
 中古体 春きぬと けさしも人の つげなくに 空にしりても たつ霞かな
 中季体 けふこそは たつとき、しか あづまより 都にいかで 春のきつらん
 近昔体 よも山は まだふる年の 雪ながら みやこの空に はるはきにけり
 弟世体 浅みどり 春たつかたと いふばかり 山もかすみて いづる日のかげ
 当時体 くる春は のどけさも猶 たぐひあらじ 国はひのもと 時は君が世
 自創体 名のみたつ 春とやみまし けさはまづ 空のけしきの かすまざりせば

(1葉表面1行～裏面1行。各面10行構成。下線は石井が施した。)

歌の体裁が整わない明らかなものとして、春部第14題「喚子鳥」中季体2句「花みに

富士谷成章七体七百首注解に先立って

石 井 久 雄

語句を定めて意味用法の歴史を描くことは、語彙史で普通に行われ、辞典で意味用法を排列する方法の一つでもある。逆に、意味用法を定めて、それをどのように表現してきたかという記述も、探られてよい。そのような観点がありうることは石井（1992）で記し、その研究ないし実践の歴史があることも、そこおよび石井（2012）に書き留めた。成果を辞典としてまとめるならば、類義語辞典の一種となるであろう。その辞典の収載語彙をあらためて五十音順に排列し、一の語句に、どのような意味の類に属するかを示すならば、宮島・鈴木・石井・安部（2014）のようになり、意味分類の順序で排列した類義語辞典つまりシソーラス方式のものも、そこにCDで付載している。

意味用法を定めて表現の歴史をたどることは、特別に問題を限定しても進めることができる。和歌の題詠を時代ごとに行うということもその一つであり、富士谷成章が七体七百首で実現している。その七体七百首について注解を試みようとしたものの、直ちに困難に逢着し、その困難の軌跡の最初、一首一首の注解に入る前の端緒を残すのが、本稿である。

1 七体七百首

七体七百首は、成章没後18年の1797寛政9年に息・成元が校・跋を施して、刊行された。現存するものは必ずしも多くないようであるが、デジタルカラー画像・モノクロ写真・翻刻が次で公にされている。

- 立命館大学アトリサーチセンター 書籍閲覧システム

<http://www.dh-jac.net/db1/books/search.php>

- 三宅清『新編 富士谷御杖全集 第五巻』1981年、思文閣出版。pp. 523-610
- 竹岡正夫『富士谷成章全集 上巻』1961年、風間書房。pp. 1193-1252

以下では本文をこれらによる。内題「七体七百首」、外題「北辺七体七百首 全」、1冊、本文41葉、跋・刊記1葉である。内容は、堀河院御時百首和歌の百題による題詠の短歌であり、一題ごとに7首、合計700首を成章が作っている。